

近畿都市学会報

第175号

2011年5月10日
近畿都市学会

近畿都市学会・連絡先

■ 近畿都市学会事務局

〒631-8502
奈良市山陵町1500
奈良大学文学部地理学教室内
近畿都市学会 事務局
(酒井高正/稲垣稜/碓井照子)
> Eメール: info@kintoshi.org
> ホームページ: <http://www.kintoshi.org/>
> 会費納入先: ゆうちょ銀行 振替口座
00990-7-86235 近畿都市学会
※ゆうちょ以外の金融機関からは下記で送金できます。
ゆうちょ銀行 ○九九店 (ゼロキユウキユウ店)
当座 0086235 キンキトシカ`ツカイ

■ 近畿都市学会編集委員会 宛先

(原稿等はすべてこちらにお願いします)
〒530-0001
大阪市北区梅田1-2-2-600
大阪駅前第2ビル6階
大阪市立大学大学院 創造都市研究科内
近畿都市学会 編集委員会
(担当) 副編集長: 小長谷一之
> 電話: 090-4649-2590
> ファックス: 072-721-0064
> eメール:
konagaya@zc4.so-net.ne.jp

I. 近畿都市学会2011(平成23)年度春季大会のお知らせ(確定)

近畿都市学会の2011年度春季大会のプログラムは以下の通りです。

【日時】2011年6月18日(土)

【会場】京都市上京区今出川通烏丸東入ル

同志社大学・今出川キャンパス(地図は最終ページ)

○大会会場 「至誠館」3階

○懇親会会場 「寒梅館」1階「Hamac de Paradis 寒梅館」

【アクセス】JR京都駅ないし阪急京都線烏丸駅より、

京都市営地下鉄・烏丸線・国際会館方面行き「今出川」駅下車 すぐ

【プログラム】(確定)

1) (11時) 会計監査

2) 11時~12時30分 理事会・評議員会

3) 12時40分~13時20分 総会

4) 13時30分~13時40分 開会挨拶

5) 13時40分~14時30分

特別講演「都市交通機関と社会性」

同志社大学教授 青木真美氏

6) 14時30分~15時50分

特別シンポジウム「都市、災害、防災を考える」

小森星児(近畿都市学会元会長、神戸商科大学名誉教授)

碓井照子(近畿都市学会理事、地理情報システム学会元会長、奈良大学教授)

加藤恵正(近畿都市学会評議員、兵庫県立大学教授)

コーディネータ: 山田浩之(近畿都市学会会長)

7) 15時50分~17時10分 一般研究報告(3ページより要旨掲載)

[1] 「ものづくり都市・京都の現状と持続可能性」

徳岡一幸（同志社大学教授）

[2] 「飲食店アクセスマップを用いた空間認識の可視化－渋谷を事例として－」

鈴木健太（東京大学大学院 総合文化研究科 広域科学専攻

広域システム科学系 人文地理学教室 博士課程）

[3] 「都市・観光・医療：タイ、バンコクを事例として

－メディカル・ツーリズムから見た都市論－

辻本千春（成美大学准教授）

[4] 「東海地方の人口減少地域

－春日井市（高蔵寺NT）と小牧市（桃花台NT）の比較－

山田正人（星城大学准教授）

8) 17時30分～ 懇親会「寒梅館」1階「Hamac de Paradis 寒梅館」

Ⅱ. 『都市研究』第11巻 ふるってご投稿ください！

【都市研究第11巻の査読論文の公募について】（編集長：綿貫伸一郎）

第11巻の査読論文を募集いたします。締切りは2011年8月30日です。執筆要項は『都市研究』の各号に掲載しておりますので、会員のみなさまのご投稿をお待ちしております（バックナンバーは巻頭の事務局までご連絡ください）。なお、投稿は巻頭の編集委員会までお願いいたします。

Ⅲ. 近畿都市学会 理事会等のご報告

近畿都市学会2011年度第2回理事会は、日時：2011年5月9日（月）に大阪市立大学文化交流センター談話室（大阪駅前第2ビル6階）で開催され、雑誌編集、春季大会、日本都市学会賞などを検討しました。

Ⅳ. 近畿都市学会 2011（平成23）年度秋季大会のお知らせ

近畿都市学会2011（平成23）年度秋季は、2011年11月19日（土）に奈良市との共催を予定して準備を進めております。詳細はおってご連絡さしあげます。学会員の皆様はスケジュールの調整をよろしくお願いいたします。

**V. 日本都市学会 第58回大会（東北で開催）、
日本都市学会 第59回大会（九州で開催）のお知らせ。**

日本都市学会第58回大会（2011年度）は、東北都市学会が担当し2011年11月4日（金）・5日（土）・6日（日）に開催する予定です。日本都市学会第59回大会（2012年度）は、九州都市学会が担当する予定です。詳細はホームページで追って連絡してまいります。学会員の皆様はスケジュールの調整をよろしくお願いいたします。くわしくは、日本都市学会ホームページ <http://www.toshigaku.org/> をご覧下さい。

Ⅵ. 日本都市学会 常任理事会等のご報告

日本都市学会2010年度常任理事会（3月より延期）は2011年5月8日（日）に東京で開催され、2010年度報告・決算、2011年度計画・予算、年報編集、57回大会報告、58・59回大会予定等を審議しました。

Ⅶ. 事務局より

<新入会>

辻本千春（成美大学准教授）

専門分野／研究テーマ：都市政策、観光まちづくり、メディカル・ツーリズム。

荒金博美（大阪府立茨木高等学校（非常勤））

専門分野／研究テーマ：歴史的遺産を活かしたまちづくり、比較都市史。

<除籍> 臼田利之、佐々木日嘉里、陳文甲、丸橋晃、溝渕信定、与那嶺学、脇穂積。

Ⅷ. 近畿都市学会 2011（平成23）年度春季大会研究発表要旨

[1] ものづくり都市・京都の現状と持続可能性

徳岡一幸（同志社大学 教授）

京都は、古くから日本における手工業生産の拠点としての役割を担ってきたが、現在においても西陣織や京焼に代表される伝統産業の集積を維持している。同時に、とくに第2次大戦後に京都で生まれ、世界的な企業へと成長をとげた個性的なハイテク企業が少なからず存在することでも知られ、これらの企業が実践しているビジネス・モデルは「京都モデル」として注目を集めている。このように、京都は、伝統産業と先端技術産業が共存するユニークな「ものづくり都市」という特徴を有している。本研究では、京都市の工業に焦点をあて、ものづくり都市・京都の産業集積の持続可能性を考えるという視点から、工業分野における伝統産業と先端技術産業の現状分析と課題の抽出を行った。

分析にあたっては、集積の規模と特化度から、工業分野の伝統産業は繊維工業、先端技術産業は電気機械器具と精密機械器具を中心とした機械工業であるとみなし、これらの業種構成や時間的な変化を通して現状と課題を明らかにした。分析結果から浮かび上がった課題は以下のとおりである。

第1の課題は、対象とした業種を含めて、京都市の工業が事業者、従業者、出荷額すべての面で減少を続けており、工業集積としての規模が縮小していることである。さらに、京都市における開業率も低く、次々と新しい企業が誕生して成長しているわけではない。反対に、伝統産業分野では転廃業を見込む企業が多く、今後も伝統産業を中心に集積の1層の縮小が予想される。

第2の課題は、集積内における企業間の相互関係の弱さである。たとえば、京都に本社を置くハイテク企業の多くは京都市外に生産拠点を置いており、これらの企業の活動が市内の他の企業との連携・ネットワークによって支えられているとは認めにくい。また、主要な仕入先・販売先の分布をみても、伝統産業は京都市内が中心であるものの、先端技術産業の市内依存度は他の業種に比べると低くなっており、先端技術産業ほど市内における企業間の相互関係は希薄であることが示唆される。

さらに、第3の課題として、ものづくりを支える情報通信業や産業支援サービスの集積度が低いことがあげられるが、このことも京都市の産業集積における企業間の相互関係を弱めているといえる。

以上のような京都市の産業集積が抱える課題は、集積の多様性や柔軟性を損ない、集積の持続力を低下させる要因である。したがって、現在の京都市において、伝統産業と先端技術産業が共存するユニークな産業集積を今後も持続させることは容易でないことを、これらの課題は示唆している。

〔2〕 飲食店アクセスマップを用いた空間認識の可視化－渋谷を事例として－ **鈴木健太（東京大学大学院 総合文化研究科 広域科学専攻 広域システム 科学系 人文地理学教室 博士課程）**

K. リンチ以降、空間認識理解のための様々な研究法が考案され、例えば、仮想空間や現実空間での歩行や視点の追跡、メンタルマップの描画などがある。それら研究蓄積により、空間認識に関する多くの知見が得られた。一方で、社会から切り離れた研究環境や研究対象者を用いて研究が行われてきたため、従来の研究法では、具体的な対象地域における空間認識の理解に敷衍できないという問題があり、社会に浸透した研究素材の発掘が求められる。そこで、本研究では飲食店アクセスマップに着目する。飲食店アクセスマップの形態は2種類に区別することができる。一つは大手飲食チェーン店やぐるなびや食べログなどに代表される飲食店総合サイトで見られる、GoogleMapsをはじめとする地図APIを用いた情報提供である。もう一つが、書き下ろしの独自のアクセスマップである。これは制作者および想定される利用者の空間認識を反映し、総描された地図である点がGoogleMapsなどの地図とは大きく異なる。現実空間を総描して描かれたアクセスマップは、制作者および利用者の空間認識を反映して描かれたものである。したがって、このようなアクセスマップを再構成し可視化することで、人々の空間認識を分析できる。本研究では、アクセスマップから地域の空間認識を可視化する手法を提案する。

渋谷に立地する飲食店のHPに掲載されているアクセスマップを収集し、入手した地図から建物、ストリート名、道路を地区ごとに集計し、地図化した。なお、データの収集は2010年11月末～12月におこなった。

掲載されるランドマークは交差点周辺に立地する施設が多い。これは経路選択時において交差点周辺の建物はランドマークとしての重要性が高いことが指摘できる。渋谷駅西側では、渋谷の代名詞であるShibuya109をはじめシブヤ西武、東急ハンズなど、大型商業施設が立地する。一方、交差点付近に特徴的なランドマークが乏しい渋谷駅東側では、交差点の名称が地図上に記され、交差点そのものがランドマークとして認識されていることが分かった。

道路の集計ではセンター街や道玄坂など、通り名のある道路の掲載頻度が高く、小道になるほど出現頻度が小さくなるという、一般的な空間認識に即した結果が見られた。特に経路案内という目的化では主要道路の存在が大きいことが指摘できる。渋谷におけるストリートの認識は駅から放射状に伸びる道路網によって強く形成されていた。

これまで、アクセスマップは研究素材として着目されてこなかったが、本研究により地域の空間認識を描き出す素材として、その価値を示すことができた。アクセスマップはいわゆる地理学者が示す地図とは異なり、いい加減な描画も多く、分析上の制約や困難も多い。しかし、そのいい加減さを取り込んだ分析を行うことで、一般市民の持つ空間認識をより忠実に再現できるものと考えている。

〔3〕 都市・観光・医療：タイ、バンコクを事例として **－メディカル・ツーリズムから見た都市論－** **辻本千春（成美大学 准教授）**

今、世界ではメディカル・ツーリズムが大きな流れとなってきた。特にタイは、メディカル・ツーリズムの先進国であると同時に、アジアで4番目の観光大国である。

タイの首都は、バンコク（居住者 1100 万人以上）で、そのバンコクの都市住民にとってはもちろんのこと、観光客、長期滞在者、駐在員、にとって医療が充実していることは重要な点である。バンコクは観光都市であり、医療都市であるといえる。

ロングステイ財団によると、ロングステイをするうえで不安に感じることの 1 位は「医療」2642 人（54% 複数回答）、2 位は「治安」（2294 人）、約半数の人が、「医療」が一番不安と感じている。また、インターネットを活用した意識調査で、事前に必要と思われる情報の項目では、1 位「医療情報」（1085 人、67.8%）、2 位「緊急時の対処の仕方」、3 位「住居・交通情報」と続く。つまり、医療がその都市に行くかを決める重要なファクターになっていることが明らかになった。

タイの J C I 取得病院がある都市を、その特徴により分類すると、①都市型（バンコクに 9 病院）都市住民、観光客、駐在員、出張者のすべてを顧客（患者）とする総合タイプ、②リゾート型（プーケットに 1 病院、ホアヒンに 1 病院、パタヤに 1 病院）海外からの滞在者あるいは、タイ人の富裕層が多く滞在するリゾートタイプ、③産業集積地型（シーラチャに 1 病院）多くの工場団地が集積するため、日本をはじめ多くの海外駐在員やその家族が多く滞在する。国際医療機関認定 J C Iの取得病院が、都心をはじめリゾート地、産業集積地という特に海外からの人たちが多いところに存在する理由がここにある。

また、バンコクには、約 40 の公立病院と 100 を超える私立病院がある。公立病院は、ランクが高く、王室の病院は、国立シリラート病院である。一般のタイ人が通う病院も公立（あるいは大学付属）病院のため、公立病院は、王宮を取り囲むように、公共交通機関が便利な中心にあり、私立病院は、患者層が富裕層または外国人が多いため、公共機関より自動車で移動するのに便利な、少し離れた場所にあるケースが多い。

バンコクをみると、①1100 万人近い都市住民、②年間のメディカル・ツーリスト 150 万人を含む約 1500 万人の観光客、③駐在員、短期出張者を含む 200 万人の外国人労働者、が混在している。また、1100 万人の都市住民のうち、国全体のタイ人の富裕層である 3% の大半がバンコク周辺に居住しているといわれており、その数は 200 万人近くなる。これらの、外国人やタイ人富裕層にとっては、医療が充実した都市は魅力的である。その要望にこたえる設備や技術が充実した病院がおおくあり、また、タイは、タバコに関しては、非常に厳しく、医療施設を充実させることと矛盾しないように、禁煙を政策として高らかに取り入れている。

タイにおける観光と医療のかかわりをみると、観光だけではなく、医療に力を入れていることが、より多くの観光客を惹きつけてゆくことになる。これからますます、健康や医療がキーワードになる時代に、観光と健康・医療を絡めた、すなわち「ヘルスツーリズム」が都市活性化の大きな切り口になる。

〔4〕東海地方の人口減少地域 —春日井市（高蔵寺 N T）と小牧市（桃花台 N T）の比較— 山田正人（星城大学 准教授）

I. はじめに

東海地方では、桃花台 N T の新交通システムが運行を止めたことは、非常にインパクトのある出来事であった。一方で高蔵寺 N T は、好評価が伝えられている。

2 つの N T が人口の上でどう違うのか、比較した。

その結果、自然増減に加え社会増減を加えると、平成 20 年 10 月から平成 21 年 9 月では小牧市ではマイナスとなっている。春日井市も社会増減ではプラスとなっている。平成 21

年10月から平成22年9月では、春日井市では社会増減がマイナスであるが、自然増減分のプラスがあり、合わせるとプラスとなっている、ということは、人口が若返りをしている。実際には、春日井市には中部大学が立地している。

II. 春日井市と小牧市

小牧市は、鉄道があったが名古屋都心側のターミナルが地下鉄と直結していなかった。近年、地下鉄が一駅をつなぎ、名鉄小牧線と直通運転をするようになり、都心環状線と直結したが、小牧駅と桃花台NTを結ぶ新交通システムは利用者が伸びず、全国ではじめて新交通システムとして廃線となった。

この廃止となった桃花台線は、桃花台NTからさらに春日井市に伸び、高蔵寺NTを通り、JR中央線の高蔵寺駅と結ぶ計画もあった。

一方、春日井市は、JR中央線が市内を貫いており、愛・地球博から愛知環状鉄道との直通運転も始まり高蔵寺までは便の数もある。また高蔵寺は、ガイドウェイバスの終点でもあり、ターミナル性もある。

III. 社会保障・人口問題研究所の予測

この予測によれば、2005年（平成17年）を100とした指数で、2020年には春日井市、小牧市とも100を超えており、人口は他地域が減っているにもかかわらず安定していると思われていた。しかし、現実には、もう少し違った形になっている。

同研究所の予測によれば、愛知県は県として2020年にこの指数が100を超えており人口の規模縮小は起こらないという予想であった。

IV. 都市ライフサイクル論による人口規模

都市ライフサイクル論によれば、もし春日井市あるいは小牧市が名古屋市の外郊外あるいは内郊外に位置するとされるなら、外郊外ならば人口の空洞化、内郊外ならば住宅の老朽化がおこる。トレンドは外向的新都市建設から内向的都市再生へ向かっており、新しく予想される問題である。

IX. 2011（平成23）年度春季大会会場（同志社大学）地図

